

十九世紀前半の「しかし」の用例について

―おもに江戸の口語的資料を対象として―

但馬 貴 則

はじめに

現代語の接続詞「しかし」について、辞書の記述を見ると、たとえば以下のごときものを挙げることができる（用例は省略する）。

a、『日本語新辞典』（小学館）における「しかし」

①先行の事柄に対し、後続の事柄が反対、対立の關係にあることを示す。そうではあるが。けれども。

②前に述べたことはともかくとして、これから述べることが重要だという意を表す。感動をこめて話し始めるときにも用いる。それはそうと。それにしても。

b、『日本国語大辞典』における「しかし」

（「しかしながら」の「ながら」が省略された語か。副

詞「しか」に助詞「し」の付いたものとする説もある）
先行の事柄に対し、後行の事柄が反対、対立の關係にあることを示す（逆接）。そうではあるが。しかしながら。けれども。

（参考）『日本国語大辞典』における「しかしながら」

（一）〔副〕①そのまま全部。全部そっくり。すべて。さながら。ことごとく。さしながら。②けっきょく。要するに。

（二）〔接続〕先行の事柄に対し、後行の事柄が反対、対立の關係にあることを示す（逆接）。しかし。だが。さりながら。

（補注）「しか」は副詞、「ながら」は助詞であるが、「し」には、動詞「す」の連用形説と、強意の助詞説とがある。訓点語系の格式ばった散文用語で、古代では「ながら」の方に、後世では「しかし」の方に、意味の重点がかかっている。

これらを見る限りでは、接続詞としての「しかし」は、「しかしながら」とのつながりを認めると認めないにかかわらず、「逆接」が本来の意味となっているようであるが、それではa②のごとき用法はどのようにして現れたのかという疑問が出てくる。そこで本稿では、如上の問題を考えるための一つの試みとして、近代語以前の「しかし」が実際にはどのように用いられていたのかを見てゆこうとする。それは、具体的に（『日本国語大辞典』の用例を見る限り）近世全般の用例を見てゆく必要があると考えられるが、今回はその端緒とすべく、資料の入手が容易で、かつまとまった用例が見られる、十九世紀前半の江戸の口語的な資料を取り扱うこととした。すなわち、十返舎一九の『道中膝栗毛』と、式亭三馬の滑稽本五編である。なお、参考として、「しかしながら」の用例も挙げることにする。

用例の検討(原則として初出年代の古い順に取り挙げた)

一、道中膝栗毛（享和二年～文政五年刊）

凡例

- ・岩波文庫本の活字テキストに拠った。
- ・引用に際し鉤括弧を私に補い、一部の漢字（異体字や省文など）

や記号（連綿など）を通行のものに改めた。また引用を省略した箇所については「…」を用いた。

*の後に、文脈から考え得る仮の解釈を示した。その際、さきに挙げた現代語の「しかし」記述と同様に「反対、対立の関係」の意と解し得るものには「逆接」の術語を与えた。

1、「…時に飯にしよう。なんぞ菜はねへか」

「さつきのむき身殻汁さ」

「ナニ拔身がくはれるものか。しかしこいつもきらずとあればきづけへなしだ」
(三八頁)

*「むき身」を「拔身」と洒落にした表現ゆえ、「きづけへなしだ」は「食はれる」と解し得る。そこから、逆接の意と考えることができる。

2、「…サアせずことがないと諦めて繩をかゝれ。但しは踏つけてめしとらずかヤア」

「ハア成程そふおつしやればきこへましたが、しかしそれはおめへさまの得手勝手…」
(四三頁)

*今の妻と別れて自分の妹と一緒になれと迫る武士に対する弥次郎兵衛の返事で、逆接の意と考えることができる。

3、「きさまのいふには、『ソリヤさいわいの事がある。さる所の隠居が、内の腰本に手をつけ、孕したゆへ、蟬や娘の手前、しれぬさきにとて、表向いとまを出して、請人の所へ内證で預けておかれたが、どふぞ腹の子ぐるめに、金拾五兩つけて片付たいと、わしがたのまれて居るから

調度よいが、しかし女房のある上へはどふも」と、はなしにつめて、…」（四六頁）

* 「調度よい」と「どふも（困る）」とから、逆接の意と考えることができる。

4、「…コレ北八あのをりだが、それでいゝか」

「イヤもふよくてもわるくてもしかたがねへ。しかし其筈ではねへつもりだに」

「くれぐれもいめへましゐ業さらしな野郎めだ。いつその事も角もぶちまけやうか」（五七頁）

* 主人から暇をもらった北八が、その理由について「其筈ではねへ」と述べる箇所、逆接の意と考えることができる。

5、「…ドレドレしむすめはどこにゐおります。ちよつくり頼サア見せてくれさちしやりまし」

「エ、おめへもふちつとはやく來なさればいゝに、もふ桶の中へさらけこんでしまつたものを、のふ芋七」

「イヤしかし、とつさんの身では見たいは道理道理、…」（五九頁）

* 死んだ娘を見たいという父親の言葉に続く会話で、逆接の意と考えることができる。

6、「あなた方ははじめてのおきやくゆへ、それで祝つて、ひとつさし上ますのでござりますから、別に御酒代をいたゞくのはござりませぬ。おこゝろおきなく、めしあ

がつて下さりませ」

「イヤそれは先おめでたい。しかし、御ちそうになつては、ちかごろきのどくだ」（八七頁）

* 「そうはいつても」の意となるか。あるいは「酒を御ちそうしてくれるというけれども」などの逆接の意を含むということになるか。

7、「身ども當年巳のとしで、四十二才にまかりなる」

「それはおわかうござります」

「コレハ御挨拶。しかし身ども、相役の園原作野ゑもん、米木津甚太夫など、みな同年でまかりあるが、その内で身どもが、いつちわけへわけへといゝおるて」（一四六頁）

* 北八の言葉を「御挨拶」としたことに対する逆接の意となるか。

8、「本陣でどさくさまぎれに、五六ばいやらかしてきた」

「ソリヤアいゝことをした。しかし手めへも実のねへもんだ。なぜおいらもつれていかねへ」（一五五頁）

* 「それにしても」の意で解釈できるが、明らかに前の内容を承けており、「お前が酒を飲めたのはいいことだが」などといった逆接的意味を有しているともいい得る。

9、「むかふの暖簾はなんだ。しなの屋、こちらがてうじや、こゝが大和屋だな。しかしどふしてあがるのだから勝手がしれねへ」（一七四頁）

*ト書きに「かうしさをうろついている」とあることから、「場所はここであると分かるが」などの逆接的意味を有していると考え得る。

10、「…じつきにやらずに、ちよつくりよつてくれされやア」「悪いハ、北八いっぱいやらかさふ。しかし親父さん、おめへの御ちそうじやアきのどくだ」

「ハテコリヤよいといふのに。御ていの御ていの、肴アじやうにつん出してくれさい…」
(一九八頁)

*6の例と同様の解釈となるか。

11、「モシ川はひざきりもござりますかかな」

「さやうさやう。しかし水が早いから、おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ」
(二二〇頁)

*「ひざきり」＝「わたりやすい」と、「水が早いから」「あぶない」とから、逆接の意と解することができる。

12、「ヤレどふなさいました」

「イヤせうべんにいつた所が、あそこになにか、しろいものがいたと。それでこのとふり、おくびやうな人さ」
「イヤあれは襦袢でござります。コリヤコリヤおさんやいおさんやい、目がくれたに、やつぱりほしものをなせとりこまぬ。そしてさつきから、雨がほろついできたに、らつしくちもない女どもだ。しかしコリヤア、おきのどくさまでござります」
(二四二頁)

*「女ども」についての愚痴から、客への詫びへと話題が

変わっているところから、「それにしても」の意と解することができる。

13、「ア、これでおちついた。しかしおきのどくなことは、あなたのおこしのものだ」

「わしはこのとしになるが、わきざしのながれるのを、はじめて見申た」

「エ、けつのあなの、せめへことをいふおやぢめだ。…」
(二四八頁)

*「おやぢ」の脇差しを使って蛇を退治したが、その脇差しを水に流してしまったという文脈で、「それにしても」と「逆接」との、両様の解釈ができる。

14、「イヤ身ども、手作にいたいたわらふじやほかに、一そくあると、いつもゑどまで行戻りはきおります」

「ほんにわらじのきれるは、あるき下手でござりますが、あなたは道がお巧者なことだ。しかし私も、此わらじは、一昨年松前へはいてまいつたが、帰るまで何ともござりませなんだから、…」
(二六一頁)

*「巧者」なのは「あなただけではない」ということから、逆接の意と解することができる。

15、「…赤坂までわつちがさきへいつて、い、宿をとりやせう。おめへくたびれたなら跡からしづかに來なせへ。宿から向ひの人を出させておきやせう」

「それよかるふ。しかし宿はどふでもい、から、たほ(女)

とルビあり)のありそふな内にしやれ」 (二七七頁)

*「い、宿をとりやせう」に対する逆接の意となるか。

16、「…おまへひとりなら、此宿にとまらしやりませ。此さきの松原へは、わるい狐が出おつて、旅人衆がよく化され申すハ」

「そりやア気のねへはなしだ。しかし爰へ泊たくても、つれがさきへいつたからしかたがねへ…」 (二七八頁)

*「気のねへはなしだ」が「ここで泊まる方がよいかも知れない」の意となることから、逆接の意と解することができる。

17、「ホンニ北八料簡しや。おらア実に、ほんとうのきつねだとおもひつめた」

「ばかばかしいめにあつた。いまだに此手首がぴりぴりする」

「ハ、、、、しかしまてよ。斯はいふもの、やつぱりこれが、ばかされてゐるの　じやアねへか。どふやらおかしな心もちだ」 (二八一頁)

*「だが」「けれども」としてもおかしくないことから、逆接の意と解することができるが、「それにしても」としても不自然ではない。

18、「コウきた八、手めへもとんだものだ。気のちがつた娘をとらめへて、どふしようとおもつて、業さらしなおとこだ」

「へ、めんぼく次第もねへ。しかしわつちまでをきちげへとは、弥次さん、ありやアおめへ一生の出来だぜ」 (二九五頁)

*自分が咎められている状況を、相手への言葉咎めに転換しようとするくだりで、「それにしても」の意と解することができる。

19、「…となりの三味はこゝの娘か、何人だの」

「あれは二三日まへから、こゝの内にとまつてゐる、替女でおますが、よいこへだなもし。しかしまんだ、わしがじんくを、旦那がたへきかせたい」 (三二〇頁)

*「そうはいつでもやはり」「そうであるにしても」などと解すると意味が通る。あるいは「さすが」「さりととも」などの意に通ずるか。

20、「コウ酒はいゝのがあるかの、しかし諸白ではなくて、片白にはこまる。…」 (二七頁)

*「い、酒」の有無はまだ分からないので、「たとえあつたとしても」などの逆接仮定の意と解することができる。

21、「きた八きた八、実に手めへ、さつきの女と約束をしたか」「しれたことよ。しかしこつちへは來ぬつもりだ。此のつぎの間の壁を、つたわつてゆくと、いきあたつた所のふすまをあける、そこにねているといひおつたから、今にゆかねばならぬ」 (二八頁)

*逆接とも、「そうはいつでも」とも解することができるが、

「女が男の許へやって来る」ことが前提であれば、逆接となるか。

22、「ナニくへぬことがあるものだ。しかし費だからくひやせぬが、誰ぞくはせるとまだまだいくらでもはいりやす」 (三七頁)

*「食えるが、金がかかるから食わない」となることから、逆接の意と解することができる。

23、「…もふもふわたくしはかなひませぬ」

「おめへもやらかして見なせへ。こんなちいさなものは、いくらではくはれる」

「イヤそふはまいりませぬ。しかし、わたくしもあまりさんねんな。十ヲばかりたべて見ませう」 (三八頁)

*饅頭の大食いを競うくだりで、「もう食べられそうにないが、やはり食べよう」ということで、逆接乃至「そうはいってもやはり」の意と解することができる。

24、「おやくそくのとをり、饅頭代はさしひいて、おはつをの百もん下さりませ」

「今あげやせう。しかしあんまり見ごとだから、もふ二十くひなせへ。今度はおはつを三百文あげやせう。そのかはり、くはねへとこつちへ弐百とりつこだが、どふだどふだ」 (三八頁)

*前の約束を反故にして、新たな約束を取り付けるといいう文脈で、一応は逆接の意と解することができるが、現代

の用法とは異なるとも考えられる。すなわち、逆接と転換との両方の意を備えているということである。

25、「…どふぞ、こゝからおりさんせ。きのどくながら」

「ハアおいらもさつきにから、じれつたくてならなんだ。ひよんな馬にのり合せたは、こつちのふ仕合。しかしまだ銭はやらす、是までのつたを徳にして、ドレおりて行やしゃうか」 (四七頁)

*「そうはいっても」と解するのが妥当と考えられる。

26、「コレハおくれたびれでござりましょ。よふこそお入くだされました。しかし折あしく、此頃はしけで、何もおさかながござりませぬ。…」 (五七頁)

*「客の到来を歓迎すること」と、「時化で魚がないこと」との対比のために「しかし」を用いている。「そうはいっても」程度の意に解すべきか。

27、「まんざらでもねへの」

「い、女だ。しかしこゝじやア、おめへも先生かぶだ。おとなしくせぎアなるめへ」 (五八頁)

*膳を運んできた宿の女への感想を述べるくだりで、「誘いをかけたいのも無理はないが、今はやめておいた方がよい」という、逆接の意と考えることができる。

28、「…定めてこやつ、尊公のお名前をかたつて、まいつたものと見へるさいわい追付これへまいるとあれば、ナントおあひなされて、なぐさんでやるじやござりませぬか」

「さてさて大変なことだ。いやはや横着なやつもあればあるものだ。しかしわたしはあひますまい」（六五頁）

* 「なぐさんでやるじやござりませぬか」と「あひますまい」との対比に「しかし」を用いたもので、逆接というより、むしろ拒絶を誘導する意を有しているように考えられる。その意味では、訳を与えるには問題もあるが、「それにしても」と共通する性格を有するということができる。

29、「遙向ふに火が見へる。アノ火を目あてにいつて、宿をたのまふ」

「ヲ、サそれがいゝ、それがいゝ。しかし提灯の火じやアねへか」

「とんだことをいふ。戸のすき間よりもれる火だものを」（六九頁）

* 「火が見えるとはいっても」程度の意と解すべきか。

30、「…よくお出かけなさいました。しかし爰であなたのお目にか、つてはめんぼくない」（九〇頁）

* 旅先で、まだつけを払っていない米屋と出くわしたくだり、「それにしても」と解することができ、「会えてよかつたが」という前承け—その場合は逆接とよい得る—の可能性も否定できない。

31、「ナントきさまたち、さいわいのことだ。太々講おがまぬか。それも飛人といやアちつと斗、金が出るから、無

駄ながら、わしらが供になると、一文も入らず、しこたまちそうになつて、おがまれるといふものだからどふだらう」

「それは願つてもない、有がたい事でございやす。しかし、それが出来やせうかね」（九一頁）

* 「それが出来やせうかね」が反語の意を含みつつもなお疑問の範疇にとどまつていることが後の文脈から知られるところから、「そうはいつても」程度の意と解するところができる（反語となれば、逆接と考えるべきところである）。

32、「…おまいがたを、お江戸でゑらいおつきな店の、番頭衆にしよじやないかいな」

「そないなことがよござりましよ」

「しかし、訛らんしてはあかんわいの。上店といふもんじやさかい。京談でやらんせいにや、工合がわるかるが、どふじやいな」（一〇七頁）

* 「番頭をやるにしても」などの、逆接仮定の用法となっている。

33、「…わしはかわつた癖で、とかく病家へまいつても、病人のみやくを見ることを、どふもわすれてならんわいの。しかし見ずともしれたことじやが、ついでに見てしんじよ。…」（一一五頁）

* 「脈を見るのを忘れるのはよくないが、見なくとも病人

の様態は分かるからかまわない」という文脈で、逆接の意と解することができる。

34、「…血のみちは、この内儀のことでござりませう。この男は、それではござりませぬ」

「さよじや。こりやわしがまちがいじやわいの。しかし、なんならきさまも、それにしておかんと、薬もるにもいつしよにして、めんどふになふてよいがな」

(二二六頁)

*「まちがい」と「めんどふになふてよい」とが、完全な「反対、対立」の關係になつていないので、「そうはいつても」「それでも」程度の意と解すべきか。

35、「おまいのこうせきでは、おはいろが出るじやある。誰など、ゑど役者やりなされ」

「声色も二十や三十ばかりはつかひやすが、誰にしよふ。

源之助か三津五郎か、イヤ高麗屋にしゃせう。しかしゑど役者は、おめへがたにやア、わからねへからつまらねへ」

(一四六頁)

*「真似をするにしても」などの逆接仮定―「さりとて」に通ずる―の意となるか。

36、「ヲヤヲヤ、アレみんなが柱の穴をくゞつてゐるハ」

「ホンニこいつは奇妙奇妙」

「コリヤおもしろへ。しかしおいらはくゞられるが、弥次さんはふとつてゐるから、ぬけられめへ」

(一七四頁)

*「ぬけられめへ」を「おもしろくない」と解するのであれば逆接の意となるが、あるいは「ただし」などの意となる可能性も考えることができる。

37、「…どこぞへいつて槌借できさんして、つむりをあとのほうへ、打こまんしたがよいわいの」

「なるほど、こいつがはやい理屈だ。しかしそれではないのちがあるめへ」

(一七六頁)

*「頭を槌で打つ」というのが仮定の話であることから逆接仮定の意と解することができるが、状況が切迫している(柱の穴をくぐりきれなかった)ことから、逆接そのものの意となつてゐる可能性も考えることができる。

38、「…ホンニおとなりのお客、御退屈じやある。是などひとつあがらんかいな」

「ハイ、ありがたうございやす」

「しかしさめはせんかいな。モシ、おてうしごとそれへあぎよわいな」

(二二五頁)

*話す相手を変えているところから、「それにしても」の意と解することができる。

39、「ソリヤのほりたいが、かねがないといふこゝろ」

「ハ、、、、でけましたわいな。しかしはるばるの御道中、はしごのことなりや、柳ごりへもよふはいるまいに、さぞ御難儀にあつたじやある」

(二四五頁)

* 「しかし」以降、完全に話題を転換している。「それにしても」と解することができる。

40、「上がったの女にやアゆだんがならねへ。しかし、くわしうりめがおいらをい、ようにしたとおもつてけつかるであるふが、そふは虎の皮、こつちにも荒神さまがあらア」

(二九五頁)

* 按摩と菓子売りに法外な請求をされ、やむを得ず払ったくだりで、嘆きから負け惜しみへと内容が転換しているところから、「それにしても」の意と解することができる。

41、「…誠にふつてわいたよふなさいわいが來ると見へます」

「コリヤ奇妙、よくあたりやした」

「しかし変卦は乾の卦、…万事にお心をつけらるゝがよ

ござります」

(三二八頁)

* 「さいわい」と「万事にお心をつけらるゝがよござります」とのつながりから、逆接乃至「そうはいつても」「それでも」などの意と解することができる。

42、「…ときにお客さまがたは、何じやらおめでたいことがあると、夜前ちらとき、ましたが、どふでござりましたな」

「イヤいつかうやくたいやくたい。しかし命には別条なく帰りやした」

(三四九頁)

* 「厄体だが、死にはしなかった」ということで、逆接の意と解することができる。

43、「ハテ、せつかくお出たもんじや、ゆるりと御見物な

され。ホンニ住吉へはまだじやある。さいわい、けふわしも住吉へゆくさかい、お出んかいな。しかし、わしはかまや新田のかたへ用事が有さかい、舟でいこが、おまいがたは生玉天王寺かけて歩行でおでなされ」

(三五二頁)

* 「住吉へ行くにしても」という、逆接仮定の用法となるか。

44、「…コレ、火をひとつかさつし」

「ハイ、いんまツイ消ましたさかい。ちよとうつてあげましよかいな」

「イヤ、うつくらぬならこつちにもある」

「そしたら、おまいさんひとつうつておかしなされ」

「い、ことをいふ。しかしきさまのこつたものを、うつてかしやせう。ノウ弥次さん、見なせへ、乞食にしておくはおしい器量だ」

(三五九頁)

* 逆接の用法に「それならむしろ」の意を加えたものと解することができる。

45、「…あのおかたのとこへなら、わしやどふぞいきたいわいな」

「おれもうちがねへがい、か。しかし、今普請さいちうだ。出来あがつたなら呼やせう」

(三六〇頁)

* 「女は嫁になつてもよいというが、今の自分には家がな

い」という流れで、逆接乃至「それでも」などの意と解することができる。

46、「コレハ旦那、こないな破れしやうじ、百疋とはゑらかたの数珠じやわいな。しかし、是には何ぞきよとい御しゆかうがござりましよいな」
(三二六二頁)

*「それにしても」とも「割高であるとはいっても」とも解することができるが、前承けの要素を認め得るので後者―逆接仮定―が妥当か。

47、「…ノウ左平次さん、おめへが女なら、弥次さんにほれるか、わつちにほれるかどふだ」

「わしやどつちやへも気はないわいの、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし人は惚いでも、おまいがたはめんめんが己惚てじやさかい、ゑいじやないか」
(三二二頁)

*「誰もお前たちにはほれないが、お前たちは自分自身にほれている」という流れで、完全な「反対、対立」の關係になつていないところから、「そうはいっても」程度の意と解するのが妥当と考えられる。

48、「…サア、そんなら出かけやしやう」

「しかしおまちなされ。どぶじややら雨がおちてきたじやないか」
(三二九頁)

*「出かけるにしても」という逆接仮定の用法と考えるべきか。

二、式亭三馬

二―一、劇場粹言幕外（文化三年刊）

凡例

・新大系本の活字テキストを使用した。

・その他は基本的に『道中膝栗毛』の方針を踏襲した（『浮世風呂』『大千世界楽屋探』も同様）。

1、「…ソレ中二階といふ者が一枚もござへせん」

「ム、そこらさ。しかし公が梅枝ときちやア、今に花王田でひとつ嘶だ」
(三二〇頁)

*声自慢の者を賞賛するという文脈で、話題が転換せられているところから、「それにしても」の意に解することができる。

2、「…トキニ神風の伊勢六が来る筈ぢやが、味郡乃去来者行踪（あぢむらのいざとはゆけど）とルビあり）で、斯遅からうとは思ひきやぢや」

「しかし跡からト云たから、来るだらう」
(三三八頁)

*「遅いことは遅いが、きつと来るだろう」という文脈で、「そうはいっても」などの意と解することができる。

二―二、浮世風呂（文化六〇十年刊）

前編(男湯が舞台)

1、「…モシ丹溪さま鶏卵を食たいと申ます。いかゞ致しませうといはれて、ア、ア、なる程、エ、鶏卵はよろしくない。しかししたべたいと思はゞ、あひる卵を少しが能い、などゝてにはのやうな事をいふ男もだ。…」

(二六頁)

*「それでも」程度の意となるか。

2、「…どうも銭金といふやつはたまりませぬ」

「イヤイヤ至つて溜能(「ためいゝ」と振り仮名)ものだ。心がけが悪いから溜らぬ。ありがたいこの御江戸に居て、金のたまらぬ事があるものか。…、ナントどうだ。一言もあるまい」

「コレハあやまりました」

「しかし見所があるテ、此番頭はたのもしい。…」

(二九頁)

*「そうはいつでも」の意と解し得るが、「それにしても」としても文意は通る。

3、「…おつぶりは痛ませぬか」

「イエイエ何ともござりませぬ。貴公のおあたまは」

「イヤずんど痛もござらぬ。併(「しかし」と振り仮名)座頭同士鉢合をして、ヲットねぶ一ツてうといふ古い咄があつたてナ」

(六二頁)

*盲人同士がぶつかったところから、「古い咄」を連想しているので、「それにしても」と解することができる。

4、「しかし貴さまたちは、三百六十日目を睡て居るから、ねぶたくはあるまいな」

(六三頁)

*酔客が盲人をあれこれからかう場面で、「それにしても」と解することができる。

5、「…酒客めが、紙治の茶屋場を出して丸で塩町の気で語りをるから、にくさにもにくしと、紅梅籠の二つ胴をはり出させて、久しぶりの石町をきかせるつもりであつたが、赤助がいふには、やつぱり音十郎殿に稽古した、先斗町が口づいて大丈夫だといふから、仮橋を出した」

「ハ、ア一本槍じやナ。しかしおまへの浄瑠璃は、やつぱり住さんの性根で押て行なされ。それが徳じや。…」

(六九頁)

*「それでも」「そうはいつでも」などと解することができる。

6、「大せんにんじや。東へ持来もよけれど、的めはあまり仰山過るはい。しかしうまい事はうまいテ。ほんまの東口といふものは、まだまだあのやうな物じやない。…」

(七〇頁)

*逆接でも無理はないが、「それでも」「そうはいつでも」の方が妥当か。

二／三編（女湯が舞台）

7、「…乳母を付て出しましたから、只今でも御奉公が勤ります。最う早、わが儘ものでこまります」

「イエサ、やんちゃんが能うございますのさ。しかしお乳母どのが大体ではございせんネ。…」（九九頁）

*「そうはいつでも」の意と考えられるが、間があれば「それにしても」の可能性もある。

8、「…それにおまへさんネ、御縁がなくてどうも御奉公の口がはづれます。…」

「イエサ、何ごとも御縁づくでございますから、かならずお気ながになさいまし。」

しかしネ、御奉公は有がたうござりますよ。躡るとなしに行儀がよくなります。…」（一〇〇頁）

*話題が「御奉公」それ自体に転換していることから、「それにしても」の意と解することができる。

9、「…着類は綺羅が張ましてね。その上今までの衣類は段々ちいさくなりますし、何も角も只今からは大人並に拵へ直しますから、イヤハヤ大頭痛でございます」

「さやうでございませうし、かし段々順送りになすつて、あのお子さまの着古しはお妹御さまのようになりますからむだはございせん。…」（一〇二頁）

*「大頭痛」と「むだはございせん」とから、逆接と考

えることができるが、「そうはいつでも」でも意は通ずる。

10、「…おかるも身請されました所が、年明といふものは借金が多くて、丸の裸で出ますさうだから、せつなうございましてらう」

「そうサ。夫に急なことではあるしの。しかし由良之助が如不在いから、内証で手当もしたらうのさ」

（一二七頁）

*「そうはいつでも」乃至「そうであるにしても」の意と考えられる。なお、『仮名手本忠臣蔵』の内容を話題としていることを考慮する必要があるか。

11、「…おれはあぐらかきましたがおめへはねころばりましただの」

「やかましい」

「しかし能音（い、おと）と振り仮名）だつけ。ずつしりと地響がして、各別なもんだ。…」（一三三頁）

*太った下女が滑って仰向けに転んだ際の「ゆくみ」のからかいで、「それにしても」の意と解することができる。

12、「フウ嬉しいのう。初々しく能からう。しかし酒が恐るのう」

（一五四頁）

*新年の宴に呼ばれて嬉しいものの、呼んでくれた者の酒癖には閉口する、という文脈で、逆接の意とも、「そうはいつでも」の意とも解し得る。

13、「あれと、伊勢音頭が、上方者の押物だよ。シカシ拳は

強い。自慢をするも無理ぢやアねへ。…」

(一五五頁)

*「拳」は博打の名称で、前の箇所との連続性がないことから、「それにしても」の意と解することができる。

14、「あれを下に遣て挿込のある簪と取替たがの。二朱と六百いくらか足たはな。余程な損をしたよ」

「そりやアおめへ些とは損をせざらにさ」

「しかし流行だから能のう」

(二七一頁)

*「損をしたとはいっても」あるいは「それでも」などの意で解すべきか。

15、「なんの相談でもお縁やお縁やさ。朝から晩まで口づけにお縁やだ。荒神さまのお縁やお縁やが聞てあきれらア」

「ヲホ、ふけいきや。さいたふうな。しかしそんな亭主といふものはやきもち深いもんだによ」

「あの面でやきもちやきぢやア銅鑼焼だアな」

(一九三頁)

*「そうはいつでも」程度の意に解するのが妥当と考えられるが、間があれば「それにしても」の意ともなり得る。

16、「…そりやアさうと一面に伊予染だの」

「アイサ。路考茶か、鼠か、伊予染さ。みんな昔流行たさうだが、段々流行返るのだ」

「さうさ。染色も案じ尽す物だから、一人ひねつた人が有て昔物を見付出すとネ、今の目には珍らしいから、サ

ア能はと云て一人着い二人着いして流行出すのさ。しか

し丁子茶から見では、今の鼠や路考茶は近頃の物だツサ。

…」

(一九五頁)

*「路考茶」「鼠」について「昔のものではない」というための逆接表現だが、「そうはいつでも」でも意は通る。

17、「目のふちへ紅を付るのも一体は役者から出た事らしいネ」

「あれも大かたはさうだらうが、昔からする人が有から、あの方はまアゆるしもせうよ。しかし目のふちへ紅を付けた人は老て目のふちが黒くなるツサ。…」

(一九六頁)

*「役者ならよいが、女性は」という、逆接の意と解することが出来る。

18、「先達てお噂申た庚子道の記は御覧じましたか」

「ハイ見ました。中々手際な事でござります。しかし疑しい事は、あの頃にはまだひらけぬ古言などが今の如ひらけて、つかひざまに誤のない所を見ましては、校合者の添削なども少しは有たかと存ぜられますよ」

(一九八頁)

*「そうはいつでも」乃至「ただ」程度の意と解すべきか。

四編 (男湯が舞台)

19、「一体まづ女の子には、やさかたな事を教たいものでこ

ございます」

「しかし、成人しておしやらくをするやうになれば、自然とをとなしくなるから邪魔にもならねへス」

(二二五頁)

* 「やさかた」でない前提への逆接ということになる。

20、21、

「女房膏肓の次第を御覧じろかつ。あれもあの女に入れ上て、漸々内へ引込の、昼も箆笥の環が鳴るといふ世界さ。しかし此道行はあまり気恥しいネ。額の汗を下手に拭と、色男の面が藍隈になる」

「しかし、土地の風俗といふものがあつて、あれも京都などで見ると見苦くないテ。…」

(二二八頁)

* 前者は「それにしても」、後者は「そうはいつでもと解するのが妥当か。」

22、「イヤイヤ飛八さんの話はいつも鉄砲だテ」

「しかしおかしくてい、ネ」

(二三〇頁)

* 「鉄砲」に「嘘」の意がある(脚註)ことから、「本来嘘はよいものではないけれども」などの逆接の意と解することができる。

23、「よく嘘をつく男だ。アハ、、、、」

「しかし毒がなくて能嘘さ。アハ、、、。ハイどなたもおゆるり」

(二三三頁)

* 逆接とも「そうはいつでも」とも取れる。

24、「ハテ、降たてのほやほやといふ雪だから、まだ氷らず

かたまらぬ内は、自由になりやす。とんだ和いものさ。

ノウ番頭」

「ハイ。しかし二丈も積つてはどうでございませうか」

(二三五頁)

* 典型的な逆接の意と解することができる。

25、「…そんなら能は、何なとマア、御当地に順つて秤も止るは、扱又算盤も持ぬは。能かエ。しかしお値段はチト直切らにやならんぞい」

(二五八頁)

* 「その代わり」などの意と解するのが妥当か。

26、「…おまへはおまへは、折々毒性な事いはんすけれど、一体の性根は直なお方ぢやナ。併(しかし)と振り仮名) トット江戸のお方は皆左様ぢや。…」

(二六七頁)

* 「もつとも」と解するのが妥当か。

27、「なるほど宝珠をべつたりと書て、性根玉の歌がござへやした。しかしあれは上方の狂歌で、ぐつと古風な体さネ。…」

(二八九頁)

* 逆接の意と解することができる。

二二三、浮世床(文化十一年刊)

凡例

・ 古典集成本の活字テキストを使用した(『四十八癖』も同じ)。
・ その他は、『浮世風呂』などと同じ方針を用いる。

1、「アハ、、、そいつは小言八百に利を食つたといふ洒落だの。しかし長く居なさんな。息子株ぢやアあるめへし、」
：」（二六頁）

*遊里に通つたことを妻に咎められた男への言葉で、「それにしても」「そうはいつでも」のいずれにも解し得る。

2、「：咄家々々と、何でも家の字さへ付けければよいことと思ふが、咄家と云つては湯桶訓だ。：」

「そんなら咄家をやめて笑話家といひやせうね」
「しかし、今のきいたふうは何でも家の字を付けたがるよ」
（三三頁）

*儒教の半可通が学識をひけらかす場面で、「そうであるにしても」「それにしても」のいずれにも解し得る。

3、「何さ何さ、万葉家も何も入つた事ぢやアねへ」

「さういはれては論なしたが、しかし足下もおれが異見について、ちつとは物まなびをしなせへ」
（六四頁）

*実行力のない物知りを咎める場面で、「それでも」「そうであるにしても」などと解することができる。

4、「しかし美女だ」「男好きのする風だ」「亭主もちだらうの」
（六六頁）

*店の外を通る女性を見ての会話で、「それにしても」の典型例と考えられる。

5、「うぬが女房は不器量でもいゝから、がうぎと野暮でをとなしくて、亭主を大切に、しまつ者で内を納める

のがよし。友達の女房は、：なぞといふ浮虚者がいゝ、」

「そりやア誰でもさ」
「あんまりむしが好過ぎるぜ」

「しかしおれがやうな、じじむさい女房を持居る者も損だよ」
（六七頁）

*女房を論ずるくだりで、「そうはいつでも」と解するのが妥当か。

6、「引ぬきで鳥になると、女房は家鴨の精霊だらう」
「独吟のげんぢよ節で、所作をお助踊で見てへ」
「しかし家鴨と迄もいくめへ。薩摩芋の精霊さ」
（六八頁）

*醜女の女房を話題とした会話で、「精霊となつたとしても」と解することができる。

7、「：先虎と龍と戦ふと、龍は飛びあるく事が自由だから、

虎は叶ふめへ」

：「しかし、龍も雲がなくてははじまらねへぜ」
「なるほど雲にはかなはねへの」
（八一頁）

*貰つた猫に名付けをするくだりで、逆接とも、「そうはいつでも」とも解釈し得る。

8、「それでも銭のたち廻るのがおつだよ」
「ハテその筈だ。売物買物の度に只は通さねへ。是非足

駄を履くやつだ。しかし、おらが内は顔みせの二番めといふ内だから、居候の絶えねへもいゝ。：」
（九九頁）

* 困った居候のことを話題としたくだけで、「それでも」
うはいっても」などと解するのが妥当となるか。

- 9、「…役者にかぎらず、すべての事が若人の行はれる世界さ。
アしかし顔みせの二番目はいつも雪降で高麗屋の親仁が
例の洒落。…」 (一〇三頁)

* 逆接ともとれるが、「それでも」などとした方が分
やすいか。

- 10、「むかしといつても、何として当時ほどではないのさ」
「しかしまたむかしは万事の祖師だから能い事は能い
さ。…」 (一〇四頁)

* 逆接ともとれるが、「そうはいつても」程度に解する方
がよいか。

- 11、「…気が多いから、ときどきひいきが替りやす」
「情なしな御新造だの」
「役者で済んだもんだ。御亭主がその通りぢやア大事だ」
「しかしお羨しい事たぞ。代りめ代りめに幾度も御覧じ
て」 (一〇六頁)

* 御新造の歌舞伎通いを乳母が話題とするくだけで、「そ
れにしても」と解することができる。

- 12、「よしよし晩に早く仕舞つて、切を見に押かけようス。
しかし、御新造さんの時はうまい物が少からう」 (一〇七頁)

* 「それにしても」「そうはいつても」の両様の解釈が可

能だが、前承けの文脈であることを考えると、後者がよ
り妥当か。

- 13、「しかしやきもちといふやつはうるせへてネ。おらアヤ
かれた覚はなけれど」 (一一二頁)

* 複数の人物の会話で、「しかし」を用いて自分が話の中
心になるうとしていることが知られる。「それにしても」
の意となる。

- 14、「…しかし婦人といふものは兎角妬心のあるものさ。…」
 (一一三頁)

* 前例と同様に「それにしても」の意と考えることができ
る。

- 15、「…女が好いの、美しいのと云つても、眉毛を落とす時
分に落とさねへやつだから支離だ。本のことよ。いはば
化物の仲間だ。人間の交りぢやアねへ」

「しかし美だね。いやらし身たつぷり。あすこで迷はせ
ようとす洒落だ」 (一一四頁)

* 読本に出てくる美女を話題としたくだけで、「それにし
ても」「そうはいつても」のいずれともとれる。

- 16、「あの女の泣く兒を、こゝで見りやア安いもんだ」
「泪が小皺へ滞つて雪柱になるのス」

「しかし美女は泣く面までが可愛らしい」 (一一五頁)

* 前例の続きの場面で、「お互いが言いたい放題」の文脈
となつてることから、「それにしても」の意と解する

ことができる。

17、「しかし髪結もつらい職だのう」

「つらい所か、業の習時分には腰がいたくてからつきり
伸せねへぜ。…」 (二六四頁)

*髪結の渡世を話題としたくだりで、新たな話題を提供する
という文脈から、典型的な「それにしても」の意と
解することができる。

18、「しかし何の業でもお互長左衛門だけれど、こいつも年
が老つちやア出来ねへ」

「五十を越しちやアむづかしいはな」 (二六五頁)

*話題の転換がなされているところから、「それにしても」
の意と解することができる。

19、「なるほどよく多嘴(しやべく)と振り仮名)るのう」口
から先へ生れたとはこれが事だ」「香具師のいひぐさを
よく覚えたぜ」「あきれもあきれたが、感心も感心だ」

「読売や大道売のでんぼうをして暗に記えたのさ」「しか
し出来ねへ事だ」 (一七〇頁)

*「鳥屋」の口上を聞いての会話で、「そうはいつても」そ
うだとしても」などと解するのが妥当か。

20、「鬢さん、透はよしか」

「吉公どうだ。ナニ、すぎ、ウンニヤいらねへ。先刻櫛
八が来たが、誰のも買はねへ。まだいらねへ。しかし何
はねへか。間歯はねへか」

「ありやす」

「間歯でも買ふべい…」 (二七九頁)

*逆接とも、「その代わりに」「ところで」などとも解し得
る。

二一四、四十八癖(文化九〜十五年)

1、「…か、アがとつてくはうといやアしめへし、どうしえ
へるもんか」

「そりやア高が女だからい、けれど。しかしおらがか、
アは、女か、おほかめか、ももんぢいだか、わからねへ
ぜ」 (一九四頁)

*逆接の意と解することができる。

2、「…そこで一寝入、こいつは能いはえ、それにきめよう。
アしかし夜が明けたからこの狂言もむづかしいス。…」

(一九七頁)

*逆接とも、「そうはいつても」とも解することができる。

3、「…いふほどの事がみなわりい。しかし今朝はいつもよ
り御機嫌がい、だけありがてへ」 (二〇二頁)

*「それでも」程度の意と解するのが妥当か。

4、「…一尻をひり合ふ男ぢやアねへぜ」

「うさアねへ。しかし、おめへほど亭主を下直にするも
のはあるめへ」 (二〇二頁)

*「それにしても」の意と解することができる。

5、「…堀江町の庄蔵が所へ人をやつて、ざつと鰻ばかりが一円三方と御目にかげられた。シカシ庄蔵が所の魚はい、よ。しつてゐるか山田庄蔵を。…」(二一〇頁)

*「シカシ」以降、話題が別の方向へ散らかつてゐるところから、「それにしても」の意と解することができる。

6、「…ま、よどうするもんか。そのときはその時だけに工夫がつくだらうが、シカシ今がかんじんだ。…」

*「つまらぬことを苦にする人」の話で、「そうはいつても」程度の意と解するのが妥当か。

7、「…この銭が一文減つても心づかひだが、一文倍へても安気ならぬ。アしかしながら、どういふ事で夜盗がはい

るまいともいはれぬ、…」(二一六頁)

*「そうはいつても」とも、「それにしても」とも解し得る。

8、「ヲヤヲヤびつくりした。シカシいくらあたけても落とす物もなし」(二一七頁)

*鼠が騒ぐくだりで、「たとえ鼠が出たとしても」程度に解するのが妥当か。

9、「…おいらアのもの、もつとりつばにねだりてへけれど、女の子はなしか、ソレ種なしといふもんだからしかたがねへはな」

「そりやアおたげへだ。しかしむかし雛のふるびたやつをかざつておくよりもこの方が増よ」(二二四頁)

*手作りの雛人形を話題とした女同士の話で、「それでも」と解することができる。

10、「…この内でも小づかひがゐるといつてことよ。なんにもむだはねへけれど」

「しかしむだのねへともいへねへはな」(二三〇頁)

*「そうはいうけれども」などの逆接的な意と解することができる。

11、「…爰に飲みとは夢にもしらずだ。シカシ中らずといへども遠からずだネ。…」(二三五頁)

*予想が外れた旨で、「そうはいつても」程度の意と解するのが妥当か。

12、「半裏さんお間、ナニサ間にお手もおかしいぢやアねへかネ、そんなら頼まずにのむ方がい、。シカシ頼むだけこつちに一盃の徳があるス。…」(二四〇頁)

*「そうはいつても」の意と解することができる。

13、「…手前味噌で漬けたと見えて、はなはだ塩が辛い」

「でござりますか。エエなるほど、これはさやうでござりませう。へいへい。しかし何角と申しても山海の珍味が自然とあつまります所が、旦那の御威光でござりますへいへい」(二四四頁)

*「ただ」程度の意となるか。

14、「…我日本にうまれて唐山の事ばかり羨しがつてるから、本意でねへ」

「さやうでござります。へいへい居を品川にうつしては、漢土の裏店にちかよらんことを思ひ、驪を目黒に放ちては、唐人の人別に入らん事を祈る、といふ所でござりますか。ハ、ハ、ハ、」

「そこさ。しかしまた茶粕が内君が国学をはじめたとか云つて、舌つ足らずが物言ふやうに万葉家の和文を書くにもおそれる。…」 (二四七頁)

*漢学者と国学者とを皮肉つた文脈で、「それに加えて」などの意と解するのが妥当か。

15、「よしよし、このごろに三十両ばかりだましようちに切かけてやらう。シカシ、典物をはめずは借すめへか」 (二五二頁)

*「はめずは」とあることから、「たとえそうするにしても」という逆接仮定の意と解することができる。

16、「…ほんに此間唐紙の払物がござりました。お入用ならば」
「ホホウ、それはとうどよい。しかしおれは貧乏人ぢやによつて、現銀ではチト難渋ぢや」 (二五二頁)

*逆接の意と解するのが妥当か。

17、「…よし野初瀬へ路銀を費して往かずと、物干へ上がつて隣の鉢植を見ればすむ事サ。それも沢山見たくは、どこぞの縁日へ行けば植木山のごとくだ。シカシ、雪踏の裏が十一文ばかりも引が立つたらう。それがおごりよ。…」 (二五六頁)

*逆接に「それでも」のニュアンスを足した意となるか。

18、「…いやまだこんなところではならぬ。しかしかう見た所はい、心もちだ。…」 (二六〇頁)

*貯めた金を目にして悦に入っている場面で、「それでも」程度の意と解するのが妥当か。

19、「…独身ほど楽なものはねへによ」

「そりやア、おめへがいはずともだ。マア一年でもたんと楽をするが徳よ。しかし親が安心しねへから、こゝではじまらねへはな」 (二七四頁)

*「はじまらねへ」が「独身ではいけない」の意となることから、逆接の意と解することができる。

20、「誰が気も違はねへもんだのう」

「しかし違ふのもあるよ。石部金吉金兜といふ男を好く者もあるはな」 (二七七頁)

*好みの男性について語り合う場面で、逆接の意と解することができる。

21、「…鉢兵衛どんが筆筒を買つたから、おれが壺両とふんだら一両貳朱六百で買つたと云つたが、おれが壺両もすこしあたじけ茄子だけれど、何所へ出しても壺両貳朱が物はりんとありやす。六百お客になつたのさ」 (二八七頁)

「しかしその位なものさ」 (二八七頁)

*売り手の儲けが「六百」だったことが話題で、「それはいつても」程度の意と解するのが妥当か。

22、「…行なら行で水を浴びて宿に居たらよささうな物を、

あるくは身しらずだ、ネモシ」

「そのあるくが行だらう」

「行は行くといふ字だからいかさま歩行か。しかし行に
してもたつた一文で敬つて念じ奉る大日大聖不動明王を
唱へてゐる間が、がたがたがたがた胸震いで、ア、苦し
からう。…」

(二八九頁)

* 逆接と解するのが妥当か。

23、「…宿へ帰つて熱爛できうつと引かけたからう。ガしかし、

こゝえた腹へ急に熱い物は、大毒、そこが気の毒でござす。

…」

(二八九頁)

* 逆接の意に「さすがに」(「…そうはいつでもやはり)を
加えたようなニュアンスがある。

24、「七人の女は持つとも浮虚者に心をゆるすな」

「何をいはつしやる」

「しかし七人で止まらねへと十三人まではもつはエ。年
季を追ふものさ」

(二九四頁)

* 女房を何度も取り替えている男を話題としたくだけで、

「それにしても」の意と解することができる。

25、「…是等は両為だけれど、チヨツしかたのねへもんだ。

しかしいらざる世話かね」

(二九七頁)

* 縁談を勧めて断られたというくだりで、「それにしても」
「そうはいつでも」のいずれにも解することができる(前

承けなので後者の方がよいか)。

26、「…今朝も起きしなに喧嘩か。いかな事でも、夫婦中で

口舌を云つたり、ひぞつたりするとは、お中の能い事だ。

お楽だのう。おうらやましい。しかし、旦那は朝起きる

と本店へ通ひ勤で夜も店の勘定を見届けて内へ帰るのだ
から、夫婦、顔を揃へて居る時間はねへ。それだから女
郎買に来た気持だらうよ。女房も女郎もおんなじ気取さ。

…」

(三〇二頁)

* 召使同士の会話のくだりで、「それにしても」の意と解
することができる。

27、「…部屋方奉公も仇名を覚えるが面倒だのう。しかし、

おめへのやうに銭遣ひがあらくツちやア、月に五匁や拾

匁の御菜は足前が入る筈だ。旦那もさぞおこまりだらう」

(三二〇頁)

* 前例の続きで、話題が別の方向へ散らかっているところ
から、「それにしても」の意と解することができる。

28、「…お定り一丈二尺といふ所を儉約して見な。…一丈五

寸買へば野の宮、高砂だ。

しかし一尺や二尺減速(「へつたつて」と振り仮名)は
じまらねへ。そりやアおめへの量見次第、なんでもおれ
が異見に付きなよ、…」

(三二二頁)

* 難解な箇所、自分の才覚自慢をし続けると考えて「そ
れにしても」とするか、「もつと儉約できる」という流

の話題転換的の解釈との両方が考えられる。

- 36、「…長松てめへも鼻拭でも持居ろ、きたない鼻の下だ、女で見ろ鼻指はさせねへはアハ、ハ、ハ、ハ、ハ。しかし鼻が垂れ止むと、ちよつくり三挺舟でぐい極りとなるから、兎角おせわは絶えぬぞ…」
(三二六〇頁)

* 隠居が丁稚をからかうくだりで、「そんな若造でも」などと解すべきか。

- 37、「…御先祖菩提、我身の後生、一家繁盛祈禱のため、一遍も余計に念仏を申すがい、。しかし、寺狂ひが多いものさ、そこが彼過ぎたるは及ばざるがごとし、…」
(三二六〇頁)

* 「それにしても」と解するのが妥当だが、やたらと話題が飛ぶくだりゆえ、前承けの要素も皆無ではない。

- 38、「さうさうしいはな、食ふ時でも静にしな」

「食ふ時静にすれば皆他にくはれやす。しかし鴨だから平気だが、人がかうされたらどうだらう。焼鮎のやうに片身焦で眼が白くなつてゐると、片目はまじりまじりとしながらあしをびりびりびり」

「いやだよ、気味の悪い。そんなことを聞くと胸がわるくなるはな」

「そのひまに一人でしよこなめるといふ謀ス。しかし大江山のすつてん童子にでもさらはれると是非（「きつ」と振り仮名）然さ。…」
(三二六七頁)

* 酒席での会話で、前者は「それにしても」、後者は「そうはいっても」と解するのが妥当か。

二一五、大千世界楽屋探（文化十四年刊）

- 1、「…わしも一服すふべいさ」

「油をひいて、鉦でけづる上方の煙草とはちがひ申す。しかしハアたんとのまれちやア、地ざりがきれべい」

(三二七〇頁)

* 品物の自慢から、相手の吸い方を咎めることに話題が移っていることから、「それにしても」の意と解することができぬ。

- 2、「弘誓の船遊山で、真如の月見いらい冴えたことさらになしさ。しかしあの子なら、三百三両大事ないと、投げうつほどな天人もござへせん。…」
(三二七七頁)

* さえない雇われ者の境遇を述べる場で、前後の内容に矛盾も連続性もないことから、「それにしても」と解するのが妥当と考えられる。

- 3、「…あれは墓（かへる）」と振り仮名」といふものぢやがなア。教て遣したい。しかし墓といふからは、河津の祐泰が一家でがなあるぞい。…」
(三二八五頁)

* 「しかし」以降、話が曾我物語にされることから、「それにしても」と解することができる。

- 4、「清盛さまの弟御の、小旦那さままでござりやしたか。お

れが然だんべエと思つたて、案の定、違へね。しかし、尻の大ぶとはお憚ながら、大ハア、尻を撒やうなお名でござりやすね」 (三九〇頁)

*「修理大夫」を聞き違えた場面で、名前への感想に話題が移っていることから、「それにしても」と解することができる。

5、「…虎屋の名香だと偽つて大鋸屑を嗅せるには恐れるテネ。しかし蚊の出る時刻には調法でよけれど、焼香だとか云てやたらに捻りかけるは何分おそれやす」 (四〇九頁)

*前後の意味が完全な対の関係になつておらず、そこから「それでも」程度の意と解するのが妥当かと考えられる。

6、7、「…妙欄にして備へるが誠の魂祭でござへませう。しかし世間体のすまぬこともあるから、精進物でも堪忍せうが、酒はかならず備へてへてえネ。何の差別はなしさ。金になる大尺をもてなすいきで祭れば、先祖のころにかなひさうなものさ。ネエモシ、然ぢやアござへませんか」

「さればでござる。しかしながら此身に為ては成たけ清浄にせねば精霊は請ぬゆゑ、たとひ下戸の精霊へ牡丹餅を呉るとも、奇麗を専と製るが能のに、なまじいに仏法を聞はつて、此方へ備へぬは大きな量見違ひ」

*前者は「それでも」「そうはいつでも」、後者は「しかしながら」本来の逆接の意と解することができる。

8、「療治の頼所がねへ」

「とんだ災難があるもんだの。しかし何所の小二(でつち」と振り仮名)とも悪いいたづらをするよ。…」 (四三三頁)

*丁稚のいたずらで傷を受けた風見鶏と、鬼瓦との会話のくだりで、「そうはいつでも」程度の意と解するのが妥当か。

9、「…おれはいつまでも蚩尾(おにがはら」と振り仮名)だ。しかし人を下目に見て大きな面で睨付た所は、どうか好様だの」 (四三三頁)

*「人間は出世するが自分はいつまでも変わらない」という文脈で、逆接とも「そうはいつでも」ともとれる。

10、「…何様に踏あるいてもミシリともいふのぢやアござらねへ。本の事だがヘン、つがもねへ。しかし地震は身の毒だ。ア、否々。此年で落るが最期夫限か、但しは中気だ」 (四三四頁)

*「人間が歩いても大丈夫だが、地震では駄目だ」という鬼瓦の言葉で、逆接でも意は通ずるが、「ただ」程度の意とも考えることができる。

(附記)

本稿では続けて歌舞伎『東海道四谷怪談』(古典集成本)の用例も取り挙げる予定であったが、紙数の都合上別稿に俟つこととした。なお今後は、十七世紀の用例をも取り挙げた上で、本格的な検討を試みようとするものである。

平成十九年六月二十七日 原稿受理

大阪産業大学 非常勤講師